

2022 年 1 月 25 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科 課題研究

妊娠期からの母乳育児支援の実態と支援のニーズ調査

A survey of actual breastfeeding support needed during pregnancy for mothers to smoothly adapt to breastfeeding after childbirth.

20MW016

松本 紗織

要旨

【目的】妊娠中に提供されていた母乳育児支援の実態を調査する。また、産後1か月を振り返り、産後スムーズに母乳育児に適応していくために、妊娠中に授乳に関してどのような支援があると良かったと考えるか、支援のニーズを調査する。

【方法】無記名自記式質問紙による実態調査研究。研究対象は、産後1～6か月以内に正期産週数で単胎を出産した初産婦であり、母乳育児を継続している母親とした。質問紙は、妊娠中の授乳に関する認識、妊娠中に受けた支援、妊娠中に必要だと考える支援の3テーマを含めた。定量データは基本統計量を算出し、自由記載による定性データは内容分析を行った。聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：21-A048）。

【結果】74件の回答が得られ、72件を分析対象とした（有効回答率97.3%）**1.妊娠中の助産師による支援：**妊娠中に助産師から母乳育児に関して話を聞いたり、個別で相談する機会があったと回答した母親は47.2%、また、妊娠中の健診や母親学級等により母乳育児のイメージ形成をしていた者は、各々7.4%、13.2%と少なかった。また、妊娠中の母乳育児のイメージ形成に最も影響があった情報源は「身近で授乳している人の話（友人や家族など）」で64.7%、次いで、「インターネット上にあがっている情報（育児コラム）」が38.2%であった。**2.支援提供の実態とニーズ：**母乳育児のメリット、母乳育児の順調なスタートを切るための方法、産後の乳房の変化と授乳リズムについて、これらの情報を妊娠中に得ていた母親は多かった。一方で、母乳育児の不安を軽減し動機付けとなるような支援、ピアサポートとつながる機会を与えてくれる支援、母乳育児を具体的にイメージできるような支援を妊娠中に受けていた母親は極めて少ないが、支援が必要であるとする母親は多かった。妊娠中の授乳のイメージと実際の授乳との間にギャップがあった母親は83.3%であり、【何事も痛みがあること】が最も多いギャップであった。情報の有無によるギャップの認識に違いはみられなかった。さらに、妊娠中に知っておきたかった/産後早期にあると良かったと思う支援として、【実践的な技術・方法】が最も多かった。

【結論】専門職（助産師）による正しい情報にアクセスしやすいシステムを作り、具体的に母乳育児をイメージできるような効果的な情報提供のあり方を検討する必要がある。また、情報提供だけでなく、不安や心配事の相談をする機会、ピアサポートとつながる機会、実践的な技術・手技の支援が求められている。出産施設を問わず病院と地域の助産師が連携し、産前産後の継続支援を受けられるような体制を作ることが必要である。